OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドゥルーズの言語論における連鎖と時間性
Author(s)	小倉, 拓也
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 119-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

ドゥルーズの言語論における連鎖と時間性

小倉　拓也

〈要旨〉

ジル・ドゥルーズはその後期の哲学において、言語を「マルコフ連鎖」として捉えた。ドゥルーズにおける「マルコフ連鎖」とは、生命、自然、社会を貫くひとつの原理である。本稿では、一九七〇年代以降展開されるドゥルーズにおける「マルコフ連鎖」の言語論を理解するために、一九六〇年代の構造主義的言語論を、ジャック・ラカンの言語論を参照しながら検討する。ラカンはドゥルーズに先立ち、一九五〇年代から言語を「マルコフ連鎖」として論じており、そのラカンの影響を受けている一九六〇年代のドゥルーズの言語論を検討することで、「マルコフ連鎖」を、一九六〇年代以来のドゥルーズの言語論において、ひとつの重要な概念として理解することができるだろう。

はじめに

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、『意味の論理学』（一九六九年）のなかで、「構造は、まさに非物体的な意味を生産するひとつの機械である」（LS 88）と書いている。ドゥルーズは、当時の構造主義諸学の影響のもと、「意味」というものを、固定的な事物の状態や、主体の意図や、定常的な意義においてではなく、それらに先立つ「構造」の効果として捉えた。そしてその「構造」は「機械」であるといわれているのである。この「構造＝機械」という概念が示しているのは、言葉の自律的なシステム、それも、われわれをカオスから守り、世界に意味を担保する、そうしたシステムである。

このようなわれわれをカオスから守る言葉の自律的なシステムを、ドゥルーズは晩年の『フーコー』（一九八六年）において、偶然と必然の交差する「マルコフ連鎖」として素描している（F 125）。ドゥルーズにおける「マルコフ連鎖」は、フェリックス・ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』（一九七二年）や、後期の主著『シネマ2』において何度か用いられるものであるが、ドゥルーズ研究の中ではほとんど論及されていない。

「マルコフ連鎖」とは、未来における振る舞いが現在の値によって決定される確率過程のことであり、ロシアの数学者アンドレイ・アンドレヴィッチ・マルコフによって理論化されたものである。一九七〇年代以降のドゥルーズは、それをもっぱらレーモン・リュイエから借用し、生命や社会に適用している。ドゥルーズにとって「マルコフ連鎖」が重要なのは、それが「決定された連鎖からも、無作為の配分からも区別され、半偶然的な現象、あるいは依存性と不確実性の混合に関わっている」（TT 277 note 36）からであり、まさに生命や社会のそうした実相を捉えるのに適しているからである。そしてドゥルーズは、言語についても、それが「マルコフ連鎖」であると考えるのである。

本稿の構成

本稿では、一九六〇年代の「構造＝機械」の言語論を検討することで、一九七〇年代以降に展開される「マルコフ連鎖」の言語論への展望を開くことを目指す。とはいえ、ドゥルーズが「マルコフ連鎖」に積極的に言及するのは一九七〇年代以降であり、一九六〇年代にはそれへの言及はほとんど見られない。したがって、われわれは一九五〇年代から言語を「マルコフ連鎖」と捉えていたラカンの言語論と、そのラカンから強い影響を受けていた一九六〇年代のドゥルーズの言語論を合わせて論じる。それによって、言語を「マルコフ連鎖」と捉えることが、ドゥルーズにおいて一九七〇年代以降に突然現われたものではなく、一九六〇年代から一貫するものであり、ドゥルーズ哲学において重要な意義を持つということを示すことができる。以下でつねにラカンが参照されるのは、そのためである。

われわれはまず、ドゥルーズにおける意味の論理を見ることによって、意味発生の機制が異質なセリー間の交流であることを確認する（一）。次いで、異質なセリー間の交流が、「換喩」と「隠喩」からなる機械的な翻訳ないし変換の働きであることが、ラカンへの参照とともに示される（二）。それを受けて、言語の構造と発生における連鎖と時間性の問

題が、まずはドゥルーズの言語論において（三）、次いでラカンのそれにおいて（四）、順に論じられることになる。

これらを論じるなかで特別の問題となるのは、意味発生の機制であり、換言すれば、それ自体は還元不可能な音の流れが、意義を担う形態を持った単位性として切りだされてくるという事態である。異質なセリー間の交流、翻訳、変換という言葉は、すべてそれを論じるためのものである。ここまでが本稿の主要部分である。

こうした作業を経て、一九六〇年代のドゥルーズの言語論の中に「マルコフ連鎖」としての特徴・意義を見いだし（五）、一九七〇年代以降きわめて広い射程を持って展開されるドゥルーズの「マルコフ連鎖」の思想への展望を開くことができるだろう（六）。

一　意味の論理

まずは、『意味の論理学』を中心に、ドゥルーズの言語論を整理していこう。ドゥルーズは当時勃興期にあった構造主義諸学をモデルにしながら、意味の発生の論理を探究していく。眼目となるのは、意味をその発生のプロセスにおいて捉えることである。われわれはドゥルーズの論旨を追いながら、意味発生の機制を、異質なセリー間の交流として見いだすことになるだろう。

言葉の意味というものを考えてみると、まず、指示、表出、意義という命題の三つの次元が考えられる。指示は命題がどのような事態を指しているのかを、表出は命題を発する主体が何をいわんとしているのかを、意義は語が結びつく一般概念を、それぞれ表している。しかし、これらは互いが互いを前提としあうことで、循環関係に入り込んでしまい、その結果、これら命題の三つの次元では、意味の発生を問うことができなくなる。そこでドゥルーズは、エミール・バンヴェニストに倣い、意義の相対的な重要性を仮定する(1)。語が結びつく概念、すなわち意味されるものの定常性が担保されていなければ、そもそも指示も表出もしようがないからである。

しかし、たとえ命題の諸次元の中で意義を第一のものと見なしても、意義そのものの意義が問われ続けることになり、ある命題の意義は、無数の別の命題へと差し向けられていくことになる。これは「無限後退のパラドックス」といわれる。ドゥルーズはこのパラドックスを、論理学の心臓部にあるパラドックスだと考える。しかし、それは否定的な意味においてではない。ドゥルーズは、言語的存在者を無際限に生みだしていく無限後退のパラドックスが示すものを「言葉の最高の力能」だとし、それを、われわれが何かをいい表すことができ、様々な言葉を用いることができるということの基盤として見いだすのである。

この無限後退のパラドックスから重要な観点がでてくる。ある命題の意義が、前提としての別の命題へと次々に差し向けられていくのであれば、それを表現するためにひとが命題を語る当のものは、決していい当てられないことになる。逆にいえば、それをめぐって言葉が動員されるのだが、それ自体は決していい当てられることのない「何か」こそが、言葉を可能とするその発生の条件ということになる。そしてドゥルーズは、これこそを、命題の三つの次元からは独立した、「意味［sens］」として規定するのである。

「意味」の次元の導入は、これまでの命題とその三つの次元をないがしろにするものでもなければ、論理学的・分析哲学的な議論を貶めているのでもない。「意味」概念は、ジャン＝ジャック・ルセルクルが強調するように、言葉と意味をめぐる一般理論を、発生のプロセスとして捉えるために導入されているのである。(2)

さて、ある命題の意義が、前提としての別の命題へと差し向けられていくとき、あるものを他のもので説明しようとしているのだから、そこには「意味するもの」と「意味されるもの」という二つのセリーが存在することになる。これはシニフィアンとシニフィエのことであるが、ソシュール的な記号の持つ二つの側面ではない。ドゥルーズは次のように定義している。

> われわれは、それ自体で意味の何らかの側面を示すあらゆるしるしを「シニフィアン」と呼び、反対に、意味のそうした側面に相関するものとして機能するもの、すなわち、そうした側面と相対的な二元性において定義されるものを「シニフィエ」と呼ぶ。(LS 51)

すなわち、ひとつの記号に固定された二つの側面があるのではなく、何かを意味するものはすべて「シニフィアン」であり、それに相関する何かが「シニフィエ」とされるのである。だからそれは「セリー」といわれるのである。ある命題の意義が、前提としての別の命題に差し向けられていくということは、差し向けられたところのシニフィエが、それ自体、新たに差し向けるシニフィアンとして、際限なく連鎖していくということである。したがって、無限後退のパラドックスは、二つのセリーが永続的に交流することとして捉えられるのである。

そして、この交流が可能となるには、それ自体はセリーに属さずに、自らがセリー間を移動することで連鎖を引き起こし続ける、パズルの穴のような「無‐意味［non-sens］」な要素がなければならない。名とその対象が一対一対応するような構造は機能のしようがないからである。だからそれは、命題の差し向けである名の連鎖（$n_1 \rightarrow n_2 \rightarrow n_3 \cdots\cdots$）を駆動する、それ自体名かつその対象であるような自己参照的な要素（$\overline{n}$）である。無限後退は、構造上、こうした自己参照的な「無‐意味」な要素をめぐって進行する。このパラドックス的要素が、シニフィアンのセリーに過剰を、シニフィエのセリーに欠如を導入し、セリー間の不均衡をもたらし、それらの永続的な交流を保証するのである。

この「無‐意味」の機能によって、決していい当てられることのない何かをめぐる連鎖が可能となる。このように「意味」は「無‐意味」から生みだされるのである。「無‐意味」と「意味」は矛盾しあうのではなく表裏一体であり、意味発生の機制は、まさにパラドックス的なのである。

＊

ここまでで、ドゥルーズの考える意味の論理について記述してきた。それは異質なセリー間の交流として特徴づけられる。ここでは、それ自体「出来事」とも語られる「意味」概念そのものの議論には踏み込まな

い。われわれにとって問題なのは、言葉と意味を発生の相で捉えることであり、それに関しては、異質なセリー間の交流という観点が得られたことで議論を進めることができるからである。この問題を探究するために、まずは次節で「換喩［métonymie］」と「隠喩［métaphore］」をめぐるラカンの議論を参照しよう。ドゥルーズ自身が、異質なセリー間の相対的な移動を担う「構造のただ二つの因子」（ID 258）と規定する「換喩」と「隠喩」は、言語の構造と発生のメカニズムを「機械」として理解するのに有益なモデルを与えてくれると思われるからである。

二　構造を動かす因子――「換喩」と「隠喩」

ドゥルーズは『意味の論理学』の第八セリーにおいて、構造の三つの条件をあげている（LS 65-66）。それらのうち二つはすでにこれまでの記述にも現われている。第一に、構造を形成するには、少なくとも二つの異質なセリーが存在しなければならない。その一方はシニフィアン、他方はシニフィエとして決定される。第二に、そのセリーの各々は、互いに保ち合う関係によってのみ存在する諸々の項によって構成され、この関係の価値に対して諸々の特異性が対応する。第三に、セリーには属さずに、それをめぐって複数のセリーが交流するようなパラドックス的要素が存在しなければならない。

第一の条件と第三の条件は、すでにここまでの記述で出揃っており、それは「異質な二つのセリーとその交流」とひと言にまとめることができるだろう。そしてドゥルーズは、この交流を担う構造の因子として、「換喩」と「隠喩」をあげている。しかも、先にも引用したように、それは「ただ二つの因子」として、きわめて重要視されている。そして、独自の「換喩」と「隠喩」という概念と共に「連鎖」という観点を導入し、意味発生をプロセスとして理論化したのはラカンであり、ドゥルーズの立論はラカンのそれと正確に対応している。ラカンにおいて「連鎖」が問題とされるのは、言語体系の非実体的で潜在的な構造と同様に、あるいはそれ以上に、単なる音の連鎖がどういうわけか何らかの意味を生じさせてしまうという事態が重要だったからである。

ラカンは「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性」（一九五七年）において、シニフィアンとシニフィエが平行関係にある言葉の構造を「換喩的構造」と呼び、それらがダイナミックに「垂直的」に置き換わっていく言葉の構造を「隠喩的構造」と呼んでいる（E 515）。

まずラカンは、シニフィアンとシニフィエとの分断を強調し、それらが一致したり対応したりする事態が困難なことだと考える。ラカンにおいてもシニフィアンとシニフィエは、ひとつの記号の固定的な二つの側面ではないのである。すると、シニフィアンはシニフィエに到達することなく、それらを分断している線の上をひたすら連鎖することになる。

少し立ちどまって注意しておく必要がある。厳密には、シニフィアンというものがあって、それが連鎖するのではない。しばしば「シニフィアン連鎖」と訳される「chaîne signifiante」という用語は、普通に読めば「意味する連鎖」あるいは「意味を生じさせていく連鎖」という意味である。ラカンの「シニフィアン連鎖」が意味しているのは、シニフィアンがあってそれが連鎖するということではまったくなく、あるのはまずもって連

鎖であり、それがどういうわけか意味を生じさせてしまうということである。

少し迂回してしまったが、上に述べたように、シニフィアンとシニフィエが分断され、前者が後者に触れることなくただひたすら水平方向に連鎖していく事態が「換喩」とされる。こうした分断と空虚な連鎖という「換喩」の問題が提起しているのは、意味というものは、あらかじめ共時的に規定されてあるのではなく、効果として生みだされるしかないということである。

そして、これを可能にするのが、「隠喩」である。隠喩的構造においては、シニフィアンとシニフィエを分かつ水平的な分割線が垂直的に飛び越えられ、シニフィエの位置に新たにシニフィアンが入り込んでいく。「シニフィアンからシニフィアンへの置き換えにおいてこそ、意味作用の効果が生みだされる。それは詩あるいは創造である」(Ē 515)。繰り返すが、問題となっているのは、意味というものは、あらかじめ規定されてあるのではなく、あくまで何らかのシステムの効果として生みだされるということである。そして、「隠喩が位置するのは、意味［sens］が無－意味［non-sens］の中で生みだされるまさにその地点においてである」(Ē 508)といわれるように、意味発生とは、それ自体は意味を欠いた空虚なものから、意味が劇的に生まれてくることなのである。そこではまったく異質なセリー間での飛び越えが起こっている。

このように、ラカンは、意味発生の構造を、独自の「換喩」や「隠喩」という概念によって理論化している。異質なセリー間での飛び越えが起こることで意味作用が生じるということは、換言すれば、まったく質を異にするものの間で「翻訳」ないし「変換」が起こっているということである。ドゥルーズは正しくも、「換喩」を「ひとつの同じセリー内部での移動」、「隠喩」を「ひとつのセリーから他のセリーへの移動」と定義している(ID 258)。まさに、ドゥルーズがセリー間の交流として描きだした意味発生の構造は、厳密にはシニフィアンのセリーとシニフィエのセリーにおける、「換喩」と「隠喩」からなる翻訳ないし変換のシステムなのである。

このような、それ自体は意味を欠いたものの連鎖が、何らかの意味を生じさせてしまうという翻訳ないし変換の働きは、人間の意志とは無関係につねに起こっているものである。したがって、冒頭に引かれていたように、「構造は、まさに非物体的な意味を生産するひとつの機械である」(LS 88)といえるのである。

＊

ここまでで、ドゥルーズの立論をラカンのそれと対照しながら見てきた。両者に共通する点は、言葉と意味を発生の相において捉えるということである。以下では、さらに踏み込んで、『意味の論理学』においてあまり詳しく触れられていない、音素や形態素といった言語要素の観点から、言語の構造と発生について見ていこう。もちろん、シニフィアン／シニフィエから音素／形態素に言葉が変わっても、問題となるのは、単なる音の流れがどういうわけか意味を生じさせるその仕組みについてである。この議論において、言語の構造と発生における連鎖と時間性の

問題が提出されるだろう。

三　言語の構造と発生における連鎖と時間性

われわれはドゥルーズがあげる構造の第二の条件をここまで措いてきた。以下で、この第二の条件から、言語の構造と発生の議論についてより詳しく見ていこう。

再び確認しておくと、それは、セリーの各々が、互いに保ち合う関係によってのみ存在する諸々の項によって構成され、この関係の価値に対して諸々の特異性が対応する、というものであった。これは、ドゥルーズが他の書物で「相互的決定」(DR 222)と呼ぶものである。

これについて、「音素」の例を参照しよう。音素とは、異なる意義を持つ二つの語を分化させる言語学上の最小単位のことである。たとえば、英語で「考える think」と「沈む sink」を異なる意義を持つ二つの語として分化させるのは、「【θ】/【s】」という、音素の相互に保ち合う差異＝示差的な関係である。このような差異＝示差的な関係は、不可視のものであるが、現にそれによって言葉の分化がなされ、様々な意義を支えているという点で、理念的に、潜在的に、しかも十全に決定されたものとして存在すると考えられなければならない。これが、第二の条件の前半部分が意味するところである。

では、こうした差異＝示差的な構造は、どのように意味作用を生じさせるように分化していくのか。それは、いかにして音素は、形態素や意義素といった異質なセリーへと関係していくのかという問いでもあり、いかにしてシニフィアンのセリーとシニフィエのセリーが交流するのかという問いでもある。たとえばドゥルーズは『意味の論理学』第二六セリーにおいて、エドモン・オルティグを参照しながら次のように述べている。

> 確かに、「形態素」や「意義素」において可能なすべての言語的弁別は、「音素」が保証しているのだが、しかし逆に、音素の弁別において、当該の言語体系にとって妥当な弁別を決定するのは、意義と形態の単位である。(LS 215)

一見すると何をいっているのかつかみにくい箇所であるが、これはきわめて重要な記述である。これを理解するために、オルティグ自身が依拠しているバンヴェニストを参照しよう。

バンヴェニストは、「言語分析のレベル」(一九六二年)において、言語の分析に「レベル」という観点と、「線分分割」と「代入」という操作を導入し、言語を異質なレベル間の方向性を持ったものとして捉える。線分分割とは、言語要素を下降的に分割していくことであり、それによって形態素などの上位レベルの言語要素が、下位レベルの音素によって支えられていることが見いだされる。しかしその一方で、そうして見いだされた音素は、それだけでは何者でもない。それは、上位のレベルにおいて単位を構成する可能な連鎖――その可能な用法を規定する操作が「代入」である――としてしか存在しえないのである。「ひとつの言語要素は、より上位の単位において同定されるときにのみ、単位として受け容れられるだろう」[3]。すなわち、言語要素は遍くより下位の要素に支え

られているのだが、線的な連鎖におけるその可能な組み合わせは、必ずやより上位の要素に対して構成的（あるいはバンヴェニストの言葉では「組み込み的［intégrative］」）でなければならないのである。下位方向と上位方向への言語要素のこの二つの方向性、これが先ほどのドゥルーズの引用が意味するところである。

ここで、差異＝示差的な関係の価値に「特異性」が対応するという、構造の第二の条件の後半部分を思いだす必要がある。この「特異性」を理解するために、バンヴェニストの単位構成の議論を前提としつつ、『差異と反復』における形態素の規定をめぐる一連の記述を分析しよう。ドゥルーズによると、「しかじかの言語体系において妥当な価値を持つ音素の選別は、文法的な構築物の要素としての形態素と切り離せない」（DR 265）。そして、形態素とは、差異＝示差的な音素の「漸進的な規定の対象」（DR 265）なのであり、音素の連鎖における「差異＝示差的な閾［seuil］」（DR 265）において形態素の単位が構成されるのだといわれる。さらにドゥルーズは、音素の連鎖における形態素の漸進的な規定が巻き込んでいる、「純粋に論理的な時間」（DR 265）を強調している。まず二つの点を確認しておこう。第一に、言語の構造と発生において構成される単位性［unité］は、連鎖における漸進的な規定の対象であり、それは「差異＝示差的な閾」において生起する。そして第二に、単位性の構成には、「純粋に論理的な時間」が巻き込まれている。この「論理的な時間」とは一体何を意味するのか。これは、音の実際の客観的継起のことではなく、その効果として生じる言葉に内的な遡及的な時間性のことだといえる。というのも、形態を持たず意義を担わない音素の連鎖が、何らかの意義を担う形態を持った単位性を連鎖において漸進的に規定するということは、つねにすでに流れている還元不可能な音の流れが、ある特異点ないし「閾」において区切られ、それまでの流れが遡及的に線分化され、ひとつの単位として事後的に構成されるということだからである。この「論理的な時間」は、内容と言葉遣いの両方からして、後に確認するラカンのそれと重なっているので、ラカンを論じる箇所で振り返る。ここまでで、言語の構造と発生において、ドゥルーズが、連鎖のプロセスと、ある特殊な時間性を重要視していることが理解できるだろう。

以上の議論を「セリー」という言葉を用いて捉えなおし、言語の構造と発生を、ここでも翻訳ないし変換の機械的システムとして定義しよう。ドゥルーズによれば、差異＝示差的な関係にある言語要素は必ずや、音素のセリー、形態素のセリーなど、複数のセリーへと組織されている。そして、それだけでは構造は機能せず、セリーが他のセリーとの関係に入り込んでいくことで構造は機能するのであった。言語構造における形態を持った言葉の構成において起こっていることは、セリーが他のセリーとの関係に入り込んでいくということである。これは、音素のセリーにおける換喩的な連鎖が、形態素のセリーへと隠喩的に翻訳されることにほかならない。そして、語彙や文といった上位のレベルもそれぞれセリーを組織するのであれば、言語の構造と発生とは、それら諸レベルの全階梯における、下位方向へ微分化されている言語要素の、上位方向への構成的（組み込み的）依拠による、換喩／隠喩的な展開にほかならない。構造はまさに、複数のセリーが関係し合い機能する翻訳機械なのである。ここで注意すべきなのは、これは決して、既存の上位の形式性に

従属していくプロセスではないということである。というのも、差異＝示差的な関係ないし比が変化すれば、プロセス全体が変化を被るからである。より上位の形態は、より下位の要素の連鎖において漸進的に規定される「閾」において構成されるのであった。これは、連鎖が外延的な形態を前提とするのではなく、形態が差異＝示差的な関係ないし比に支えられ、それによって生みだされるということを意味している。ドゥルーズが依拠しているオルティグの言葉をかりるなら、こうしたプロセスはまさに「『差異』の純粋運動」[4]なのである。

＊

次に、以上のドゥルーズによる言語の構造と発生の議論を、ラカンの議論を見ることによって補完しよう。ここでラカンを参照するのは、「マルコフ連鎖」として言葉を捉える発想を、ドゥルーズに先立ってラカンが先駆的に展開しているからである。これをとおして、ドゥルーズの言語論において言葉を「マルコフ連鎖」として理解する展望が開かれるはずである。

四　ラカンによる「マルコフ連鎖」の導入

よく知られているとおり、ラカン派のキー概念は、「他者の欲望」である。ラカン自身が汎欲望論者であり、そのことが「他者の欲望」の様々な解釈と援用を引き起こしてきたが、この概念はそもそも、厳密に言語の問題に、意味作用の生成の問題に関わっていることを忘れてはいけない。[5]ラカンにとって、言葉と意味は、「他者の欲望」と不可分である。というのも、単なる音の連鎖を、意味を持った言葉として了解するとき、そのように意図ないし欲望しているはずの他者に対する、狂気にも似た無根拠な「信」があるからである。換言すれば、われわれが世界に意味を認めることができるのは、そのように欲望しているはずの他者を、抽象的な存在としてではあれ、われわれが信じているからである。したがって、言語をめぐるラカンの問いとは、「他者の望むこと」との関係において、いかに意味が発生し言葉が構成されるのかというものになる。

ラカンの言語論のモチーフは、『盗まれた手紙』についてのセミネール」（一九五六年）に典型的に見られる。そこでラカンは、マルコフを引きながら、賽子の丁半ゲームの結果を、一定の規則にしたがい記号化すると、偶然のはずの記号連鎖のあり方が、必然化される事態を記述している（E, 丰丰）。この丁半ゲームに重ねられている問題は、単なる音の偶然的な連鎖が、規則によって拘束され単位性を獲得し、どういうわけか意味作用を生じさせてしまうということである。

ここでは、議論を分かりやすくするために、文字の連鎖が語彙の単位を構成するマルコフ連鎖について考えてみよう。マルコフ連鎖については、未来の振る舞いが現在の値によって決定される一種の確率過程と理解しておけば足りる。たとえば「c」が与えられたら、それに続く可能な文字の連鎖は膨大にあって、何がくるかは偶然的である。しかし次に「c-h-」とくれば、その可能性はいくらか限定される。さらに、「c-h-a-」、「c-h-a-r-」ときて、さらに「c-h-a-r-m-」の後に「-m」ではなく「-e」が続き、その後に続くものが「-t」でないと判明したその瞬間に、この連鎖

は「chaîne」として、ひとつ上位のレベルにおいて事後的に形態と意義が確定する。また、語彙の連鎖が文レベルにおいて意義を持つ単位を構成する例としては、フランス語の「ne」を思い浮かべればよい。「ne」の意味は、連鎖の後に現われる「pas」「que」によって遡及的にのみ決定される。これらの例が示しているのは、連鎖の可能性が漸進的に限定されていくことで上位のレベルで単位が構成されるのであり、そしてそのプロセスは、「事後性」という、継起的ではない論理的な時間性を持っているということである。音素レベルから文レベルまで、あらゆるレベルにおいてこの仕組みを想定できるだろう。ラカンは次のように簡潔に定式化している。

> 文は、その最後の項でもってのみ、その意味作用を固定する。各々の項は、他の諸項の構築物において先取りされており、また逆に、その遡及的な効果によってこれら諸項の意味を確定する。(É 805)

ここに、ラカンにおいても、先ほどのドゥルーズの議論でも確認した、意味作用の生成における連鎖と遡及的な論理的時間の問題が現われているのが理解できるはずである。

このことを図示しているのが、「フロイト的無意識における主体の転覆と欲望の弁証法」(一九六〇年)における有名な「欲望のグラフ」(図1、図2)(É 805, 808)である。図1においては、左から右への矢印がシニフィアン連鎖として表されている。音の連鎖と考えてもいいだろう。そして右下から旋回し、連鎖を引っかけて、左下に回帰する矢印が、連鎖と出会う何らかの「意図[intention]」である。多くの情報が書き込まれた図2から分かるように、二つの矢印が最初に出会う地点(A)が「シニフィアンの可能な用法の束」としての「大文字の他者」である。「大文字の他者」は、われわれに意味を見いださせる「望むこと」が帰属する可能性のコードである。この可能性のコードを経ることで、音の連鎖は「区切り」を入れられ、事後的に形態と意義が確定する(s(A))。そしてその特異点が「クッションの綴じ目[le point de capiton]」と呼ばれる。このような論理的な時間の事後性を待ってはじめて、音の連鎖は声となるのである(Voix)。

以上に確認したラカンによる意味作用の生成の議論が、先に確認したドゥルーズのそれと並行するものであることは、その内実からして明らかである。実際、他者に関してもドゥルーズは、それを知覚や欲望の組織化を担う「可能的なものの構造」として定

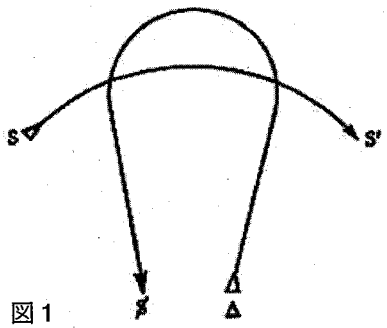

図1

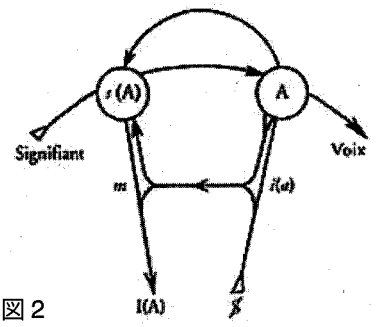

図2

義しているのだが、ドゥルーズは「構造としての他者」の喪失をラカンに言及しつつ「他者の『排除』」と形容しているので、この「可能的なものの構造」は意味作用についても妥当することになる(6)(LS 359-360)。

*

以上で、ドゥルーズによる言語の構造と発生の議論を、ラカンの意味作用の生成の議論と対照させて見ることによって、ドゥルーズの言語論を「マルコフ連鎖」として捉える準備ができた。次に両者の言語論から引きだせるポジティヴな点をまとめ、その作業をとおして、逆にドゥルーズとラカン両者の「マルコフ連鎖」の決定的な差異について明らかにし、ドゥルーズ的「マルコフ連鎖」の固有性へと目を向けよう。

五　ドゥルーズ＝ラカン的言語論の帰結
——カオスからの懸隔と創造性

整理しておくと、われわれの議論において特別の問題となっているのは、単なる音の連鎖が、どういうわけか何らかの意味を生みだしてしまうということである。より厳密にいえば、それは、本来は還元不可能なはずの線的な音の継起が、もはや単なる音ではない形態と意義を持ったひとつの単位性へと機械的に翻訳ないし変換されるという事態である。そして、そうした単位性の構成には、言語要素の異質なレベル間での飛び越えと、線的継起とは逆行する遡及的な論理的時間が巻き込まれているのであった。

こうした言葉の自律的なシステムに賭けられているのは、第一に、物体的混合のカオスから懸隔を保ち意味の世界に住まうこと、第二に、それでいて、情報とその伝達ツールには還元されない、言葉の本性的な創造性を擁護することである。そして、この二つの点を集約するのが、すぐ後に確認する「文法」あるいは「統語法」である。

第一の点から考えよう。そもそもわれわれに与えられるのは、物理的な音でしかなく、決して言葉ではない。単なる音は物と変わるものではない。われわれが意味の世界に住まうには、音を物から区別して言葉にする境界面が必要である。それを担うのが、複数のセリーから構成される翻訳ないし変換の機械的なシステムなのである。とりわけ、そのシステムが有している、線的継起に対して逆行する遡及的な論理的時間性は、事物の世界には決して存在しない、言葉に内的なものである。単なる物理音ではない言葉とは、本性的に、その発生の瞬間から物の秩序とは別の秩序を打ち立てるものなのである。だからドゥルーズは、音を物から区別し、意味がそこに存立する境界面を、「形而上学的［メタ物体的］表面」(LS 243)と呼ぶのである(7)。この「表面」が、われわれをカオスから守るシステムとして描かれるのである。このようなドゥルーズの立論は、その目論見からしてもラカンの「象徴的なもの」の理論とぴったりと重なっている。

第二の点について検討しよう。ラカンは、われわれが描いてきた音の連鎖を上位の単位性へと構成する秩序を「文法［grammaire］」と呼んでいる(Ē 502)。これが一般的なそれなのか、ラカン用語としてのそれな

のかはよく分からないが、少なくとも二つのことを含意しているといえる。ひとつはいうまでもなく、たったいま確認したとおり、単なる物理音を言葉にして、意味を生む、そうしたシステムを担うもののことである。このことは逆説的に二つめの含意を導く。すなわち、一見すると言葉において厳密な規則性を体現するように思える「文法」は、逆に、言葉の創造性の条件でもあるということである。われわれは、単なる音は意義を欠いたものであるが、意味はそこから生みだされるということを繰り返し強調してきた。換言すると、「文法」と呼ばれる秩序が保たれているかぎり、それ自体は意義のない連鎖は、何らかの意味を生みだすのである。たとえばドゥルーズは『意味の論理学』で、フッサールの「反意味」を、非物体的な意味を語る優れた概念として用いているが、ルセルクルはそれを強く意識しながら、「統語法」という観点から次のように述べている。

> 無意味［*Unsinn*］が統語法にまったく配慮しないのに対して、反意味［*Widersinn*］においては言語の「形式的な」側面、すなわち統語法が保たれている［……］。反意味は、形式上の位置が実体的な首尾一貫性［すなわち存在論的要求］を考慮せずに満たされるときに得られる。(8)

たとえば、ノーム・チョムスキーの有名な創作文「無色の緑色の観念は猛烈に眠る［Colorless green ideas sleep furiously］」は、たしかにそれが存在論的要求を満たしえない点で意義を持たないが、しかし、統語法を保っているかぎりで、反意味的に、まさに「隠喩」的に意味を生みだしてしまうといえる。これが、単なる音の連鎖がどういうわけか意味を生みだしてしまう仕組みが、ラカンにおいて「文法」と呼ばれるゆえんである。この言葉の創造性は、それが存在論的要求を満たさないという点で、われわれが先ほど確認した、事物の状態に還元されない非物体的な言葉の秩序と直結しているし、ドゥルーズは言葉のこうした側面について、『意味の論理学』の第五セリーにおいて詳しく論じている（LS 41-49）。

このように、カオスから懸隔を保ちかつ言葉の創造性を保つというドゥルーズ＝ラカン的な賭け金が、「文法」「統語法」という観点から明らかになった。以上から、ドゥルーズ＝ラカン的な言語論を「マルコフ連鎖」として正確に規定することができる。

一般に、言語論における「マルコフ連鎖」は、次のように定義される。それは、記号の連鎖において、パラディグマ的な選択とシンタグマ的な位置どりという二つの軸を結合させることによって、位置から位置へと文の表面構造を生みだしていく「統語法的機械」のことである。(9) それはまた、英米系の認知言語学、コンピュータ言語学においても、確率過程のシミュレーションとして採用されている。そして「マルコフ連鎖」の特徴は、①線的である、②偶然的である、③部分的に依存的である、と規定される。(10) 線形性については連鎖という観点が、偶然性と部分的依存性については、いかなる連鎖であれそれが規則を保つのであれば意味を生みだすという観点が、それぞれ、われわれが見てきたドゥルーズ＝ラカン的な言語論と一致している。また、マルコフ連鎖が可能性の

漸進的な限定によってことにあたる確率過程であるということは、われわれの「遡及的な論理的時間」と一致する。ルセルクルは、クッションの綴じ目によって区切られて遡及的・事後的に意味が生産されるラカン的なマルコフ連鎖を、「統語法の強度 - 内包的線 [la ligne intensive de la syntaxe]」と呼び、それによってドゥルーズの言語論を特徴づけている。(11)

「マルコフ連鎖」として捉えられた言語は、その統語的進展における偶然性ゆえに、その都度無意識や欲望や情動が介入し、遡及的な時間性ゆえに、あらかじめ決まったものとしてではなく開かれたものとして意味を規定し、またその部分的依存性にゆえにカオスに陥ることなく、創造的な意味を生むのである。機知やユーモアは、言葉のこうしたシステムの効果だといえる。ここにおいて、もはや体系性や規則性と、それを侵犯する作用とが対立させられることはない。それらは原理上分かちがたく相互に折り込まれているのである。われわれが、言語の構造と発生が、決して既存の上位の形式性に従属していくプロセスではないと強調したのも、このことを指している。それは、連鎖のその都度に意味が変化していくようなシステムなのである。これが「マルコフ連鎖」として捉えられるドゥルーズ＝ラカン的な言語論の最も肯定的な側面だといえるだろう。

六　展望

われわれは以上のようにドゥルーズ＝ラカン的な言語論を評価してきたが、しかし、「マルコフ連鎖」においてドゥルーズがラカンを超えていく点を次に認めなければならない。それによって一九七〇年代以降のドゥルーズの「マルコフ連鎖」の射程が確認されることになる。

まずはシニフィアン／シニフィエについてである。すでに確認したとおり、ドゥルーズは『意味の論理学』における構造の第一の条件において、少なくとも異質な二つセリーが存在しなければならず、その一方はシニフィアンとして、他方はシニフィエとして決定されると述べている(LS 62)。すなわち、異質なセリーは複数あるのだが、最低限シニフィアンとシニフィエのセリーが必要ということである。この記述から、ドゥルーズの構造主義とそれを特徴づけるセリー間の交流という理論においても、シニフィアンが特権的なものと見なされていることが理解できるし、われわれはその記述のとおりに論を進めてきた。これはきわめてラカン的な観点である。

しかし、シニフィアン／シニフィエを特権的とする「マルコフ連鎖」は、ラカンが「クッションの綴じ目」と呼んだ、執拗な意味論的なピン留めにおいて、結局は単一の意味作用へと帰結してしまう。もちろん、ルセルクルが冷静に指摘するように、意味発生を問題とする以上、これはドゥルーズにおいても払わなければならない代償である。(12)

しかし、『意味の論理学』の二年前に執筆された「何を構造主義として認めるか」において、シニフィアンの特権性に対して、消極的にではあるが、疑義が呈されている。

> 第一のセリーは基盤をなすのか、そしてそれはいかなる意味においてなのかという問い、第一のセリーはシニフィアンで、他のセリーは単にシニフィエなのかという問いは、複雑な問いであり、それゆ

えわれわれはいまだその性質について精緻にすることはできない。(ID 255)

時系列的にいって評価に難しい記述だが、もしシニフィアンが第一の特権的なセリーでないなら、「マルコフ連鎖」は、単に人間に固有の意味を生みだすものであるだけでなく、より非人間的な様相を呈することになる。シニフィアンは、もっと大きなシステムの中のひとつではないのか。言語や意味は、そうしたより大きなシステムの中でこそ、捉えられるべきではないのか。これが一九七〇年代以降の、ドゥルーズの「マルコフ連鎖」を特徴づける点となる。これについて本格的に論じるのは別の機会に譲らざるをえないが、最後に、一九七〇年代以降、生命や社会を射程にした「マルコフ連鎖」への道筋を示しておこう。

一九七〇年代以降、ドゥルーズとガタリは、「マルコフ連鎖」を必ずといっていいほどリュイエの『生ける形態の発生』(一九五八年)から援用している。リュイエはそこで、マルコフ連鎖を、形態発生、進化、文化など、多様な領域を包摂する理論として展開している。マルコフ連鎖は、言語学的な記号だけでなく、生命、文化、社会のあらゆる記号に適用され、それらの線的、偶然的、部分的に依存的な連鎖がコード化される仕組みが探究されていく。それにより、シニフィアンはその特権性を失い、より大きな連鎖ないしシステムのひとつとして相対化されることになる。これ受けた自然主義的な連鎖の思想が『アンチ・オイディプス』の最もラディカルな企てである。

遺伝子のコードにおいても、社会のコードにおいても、シニフィアン連鎖と呼ばれるものは、ひとつの言語である以上に、ひとつの隠語であり、非シニフィアン的な要素から成り立っている。これらの要素が意味や意味作用の効果を持つことができるのは、大きな集合の中でのみである。これらの要素は、くじ引きの連鎖や、部分的な依存関係や、中継の積み重ねをとおして大きな集合を形成しているのである。(AŒ 343-344)

このように、『アンチ・オイディプス』において、「マルコフ連鎖」はきわめて壮大なパースペクティヴのもとで考えられている。とはいえ、これによって嬉々としてラカンをこきおろすのも早計であろう。アンヌ・ソヴァニャルグが指摘するように、「シニフィアン連鎖が意味を生じさせるのは、それが記号によって形成されているからであって、記号そのものがシニフィアンだからではないということを明確にするなら、ラカンが語ったようにシニフィアン連鎖について語ることは十分に可能である」[13]。ラカンの「シニフィアン連鎖」について、シニフィアンなるものがあってそれが連鎖するのではなく、まず連鎖があって、それが意味を生じさせるということは、われわれがすでに確認したとおりである。それにもかかわらずラカンの「マルコフ連鎖」の射程が、あくまで言語学的、精神分析的なものでしかないことは確かである。だからわれわれは、ラカンを経て、ドゥルーズとガタリと共に、来たるべき「マルコフ連鎖」の思想へと向かわなければならないのである。

単に人間の歴史を生物学化するのでも、自然の歴史を人間化するので

もなく、人間の根底にあり、生命、社会、言語を貫く壮大な連鎖のシステムを哲学すること、それによって現代の新たな言語論を打ちたてること。ドゥルーズの「マルコフ連鎖」の思想が指し示し、われわれが着手しなければならないのは、まさにそうした試みなのである。

註

(1) Cf. Émile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, I, Gallimard, 1966, p.51.

(2) Jean=Jacques Lecercle, *The Violence of Language*, Routledge, 1990, p.177.

(3) Benveniste, *op.cit.*, p.123.

(4) エドモン・オルティグ『言語表現と象徴』宇波彰訳、せりか書房、一九七〇年、一五四頁

(5) ラカンにおけるシニフィアン連鎖の構想を、「同一化」の問題との関連から明らかにしている以下の論考を参照。原和之「どこにもない場所の地図を発明する:「連鎖」の思想とその帰結――J・ラカンの「グラフ」とその再構成」『電気通信大学紀要』(一二巻一号)、電気通信大学、一九九九年、三〇~三一頁。また、ラカンにおける「同一化」については、それを単なる模倣や対象関係論的なものから峻別している「現実原則の彼岸」(一九三六年)を参照。「同一化の過程、それは模倣の過程とはまったく区別される[……]。ひとつの構造の全体的な同一視としてだけでなく、そうした構造をいまだ未分化な状態へと組み込む発達の潜在的な同一視としても、同一化は模倣と対立する」(É 88-89)。

(6) 意味作用に関わる「排除」の機能については、Jacques Lacan, *Le séminaire, Livre V: Les formations de l'inconscient, 1957-1958*, ed. Jacques-Alain Miller, Seuil, 1998, pp.162-163. を参照。

(7) ここでいう「形而上学的[métaphysique]」という言葉は、それが身体の物体的表面との対比において提出されているので、厳密に「メタ物体的」と解されなければならない。

(8) Lecercle, *op.cit.*, p.153.

(9) Jean=Jacques Lecercle, *Deleuze and Language*, Palgrave Macmillan, 2002, p.94.

(10) *Ibid.*, p.96.

(11) ジャン=ジャック・ルセルクル「統辞法の強度 - 内包的線」大山載吉訳、『現代思想』(第三六巻第一五号)、青土社、二〇〇八年、一九一頁。

(12) Lecercle, *Deleuze and Language*, *op.cit.*, p.97.

(13) Anne Sauvagnargues, *Deleuze et l'art*, PUF, 2005, p.188.

参考文献(括弧内は本文中に指示する際の略号)

Émile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, I, Gallimard, 1966

Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968 (=DR)

――*Logique du sens*, *Minuit*, 1969 (=LS)

――*Cinéma 2, l'image-temps*, Minuit, 1985 (=IT)

――*Foulcault*, Minuit, 1986 (=F)

――*L'île déserte et autre textes*, Minuit, 2002 (=ID)

Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Œdipe, capitalisme et schizophrénie* 1, Minuit, 1972 (=AŒ)

原和之「どこにもない場所の地図を発明する：「連鎖」の思想とその帰結
——J・ラカンの「グラフ」とその再構成」『電気通信大学紀要』（一二巻一号）、電気通信大学、一九九九年
——「「ラカン的」概念としての「シニフィアン連鎖」（1）——延命する最後の「ソシュール現象」からの離脱の試み」『電気通信大学紀要』（一三巻一号）、電気通信大学、二〇〇〇年
——「「ラカン的」概念としての「シニフィアン連鎖」（2）——延命する最後の「ソシュール現象」からの離脱の試み」『電気通信大学紀要』（一三巻二号）、電気通信大学、二〇〇一年
檜垣立哉「ドゥルーズ哲学における〈転回〉について——個体化論の転変」小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社、二〇〇八年
Jacques Lacan, *Écrits*, Seuil, 1966 (=É)
——*Le séminaire, Livre V: Les formations de l'inconscient, 1957-1958*, ed. Jacques-Alain Miller, Seuil, 1998
Jean=Jacques Lecercle, *The Violence of Language*, Routledge, 1990
——*Deleuze and Language*, Palgrave Macmillan, 2002
——「統辞法の強度 - 内包的線」大山載吉訳、『現代思想』（第三六巻第一五号）、青土社、二〇〇八年
エドモン・オルティグ『言語表現と象徴』宇波彰訳、せりか書房、一九七〇年
Anne Sauvagnargues, *Deleuze et l'art*, PUF, 2005
James Williams, *Gilles Deleuze's Logic of Sense*, Edinburgh University Press, 2008

La chaîne et la temporalité dans la théorie deleuzienne du langage

OGURA Takuya

Dans ses travaux tardifs, Gilles Deleuze a considéré le langage comme la chaîne markovienne. La chaîne markovienne est pour lui un principe qui englobe les domaines de la vie, de la nature et de la société. Dans cet essai, nous examinons sa théorie structuraliste du langage des années 1960s pour comprendre sa théorie markovienne du langage qui a été développée depuis des années 1970s, en nous référant à celle de Jacques Lacan. Ce dernier avait déjà considéré le langage comme la chaîne markovienne depuis des années 1950s et l'a influencé. En nous examinant la chaîne markovienne selon Deleuze et Lacan, nous pouvons le comprendre comme un des concepts considérables dans Deleuze depuis des années 1960s.